

## 英語における主客交替

### Alternation of main and subordinate status in English

飯 田 満 良

Iida Mitsuyoshi

英語教育講座

(平成19年9月27日受理)

The present paper argues that in English syntactically main parts may correspond to semantically subordinate parts while syntactically subordinate parts may correspond to semantically main parts. For example, *I think*, which is a syntactically main clause in (ia), may be downgraded to a semantically subordinate clause in (ib). On the other hand, *rightly*, which is syntactically subordinate in (iia) may be upgraded to a semantically main clause in (iib).

(i) a. I think that reading is like traveling for the soul.

b. Reading is like traveling for the soul, I think.

(ii) a. He was rightly punished.

b. It is right that he was punished.

#### 1. はじめに

本稿では、英語における主客交替現象について考察する。一般的には、統語的に主である部分（例えば、主節）は意味的にも主（すなわち、断定的（assertive））となるのに対して、統語的に従である（例えば、従属節）は意味的にも従（すなわち、非断定的（non-assertive））となる。しかし、統語的に主であっても意味的には従となったり、統語的に従であっても意味的には主となることがある。例えば、(1a)では、一つの解釈において、主節である *I think* は統語的にも意味的にも主である。もう一つの解釈では *I think* は統語的に主であるが、意味的には従となる。この場合は、(1b)と意味がほぼ同じである。(1b)では *I think* は統語的にも意味的にも従となっている (cf. (1c), (1d))。

(1) a. I think that reading is like traveling for the soul.

b. Reading is like traveling for the soul, I think.

c. Reading is like traveling for the soul, in my opinion.

d. 思うに、読書とは心の旅である。

他方、(2a)では副詞の *rightly* は統語的には従であるが意味的には主であると言える。(2a)は(2b)と意味がほぼ同じである。(2a)に対応する(2c)では *rightly* は「当然である」となっており、意味的に主であることが明示されている。

(2) a. He was rightly punished.

b. It is right that he was punished.

c. 彼が罰せられたのは当然である。

本稿では、このような英語における主客交替現象を具体例に基づいて見ていく。

## 2. 主客交替現象

### 2.1. 主から従への交替

ここでは、統語的に主である節が意味的に従となる例を見ていく。(1) を (3) として再掲する。

- (3) a. I think that reading is like traveling for the soul.  
 b. Reading is like traveling for the soul, I think.  
 c. Reading is like traveling for the soul, in my opinion.  
 d. 思うに、読書とは心の旅である。
- (4) a. It's going to rain, I'm afraid.  
 b. 恐らく、雨が降るだろう。

(3a) の一つの解釈では I think は統語的にも意味的にも主となっている。もう一つの解釈では I think は統語的には主であるが、意味的には従となっている。この場合、I think を後置して (3b) のようにすることができる。(3b) は (3c) とほぼ同じ意味である。(3b) では I think は統語的にも意味的にも従となっている。ここでは I think は (3c) の in my opinion と同様に副詞的に機能している。(3a) に対応する (3d) でも「思うに」は副詞的に機能している。(4a) に対応する (4b) でも「恐らく」(もとは「恐れることには」を意味していた) は、明らかに副詞として機能している。

このような例は (3) のような例だけに限られるものではない。以下、(3) と似た例を挙げる。

- (5) a. He chanced to be out when I called.  
 b. He was out by chance when I called.  
 c. 電話をしたら彼はたまたま外出中だった。

(5a) で chanced は統語的には主であるが、意味的には従である。(5a) と意味がほぼ同じ (5b) では chanced が意味的に従であることが明示されている。(5a) に対応する (5c) でも、(5b) と同様に、「たまたま」は副詞として機能し、意味的に従であることが明示されている。

- (6) a. He was lucky enough to escape unhurt.  
 b. Luckily he escaped unhurt.  
 c. 幸いにも彼は怪我せずにすんだ。

(6a) で was lucky は統語的に主であるが、意味的には従である。(6b) で was lucky は意味的に従であることが明示されている。(6a) に対応する (6c) でも、(6b) と同様に、「幸いにも」は副詞として機能し、意味的に従であることが明示されている。

- (7) a. He was kind enough to lend me a large sum of money.  
 b. He kindly lent me a large sum of money.  
 c. 彼は親切にも多額のお金を貸してくれた。

(7a) で was kind は統語的に主であるが、意味的には従である。(7b) で was kind は意味的に従であることが明示されている。(7a) に対応する (7c) でも、(7b) と同様に、「親切にも」は副詞として機能し、意味的に従であることが明示されている。

- (8) a. I had the good fortune to obtain his help.  
 b. Fortunately I obtained his help.  
 c. 幸運にも彼の助力が得られた。

(8a) で had the good fortune は統語的に主であるが、意味的には従である。(8b) で had the good fortune は意味的に従であることが明示されている。(8a) に対応する (8c) でも、(8b) と同様に、「幸運にも」は副詞として機能し、意味的に従であることが明示されている。

### 2.2. 従から主への交替

#### 2.2.1. 副詞・前置詞句

ここでは統語的に従である副詞・前置詞句が意味的に主になる例を見ていく。

- (9) a. He is a very bright boy, and his parents may well be proud of him.  
 b. …, and it is reasonable that his parents should be proud of him.  
 c. … だから彼の両親が彼のことを自慢に思うのも無理がない。

(9a) の his parents may well be proud of him では統語的に従である副詞 well は意味的には主である。(9a) と意味的にはほぼ同じ (9b) では well が意味的には主であることが明示されている。(9a) に対応する (9c) でも, (9b) と同様に well は「無理がない」によって意味的に主であることが明示されている。

このような例は (9) だけではない。以下, (9) と似た例を挙げる。

- (10) a. Mrs. Long refused his offer with reason.  
 b. ロング婦人が彼の申し出を断ったのも無理はない。  
 (11) a. Natalie was alarmed by the news, and with reason.  
 b. ナタリはそのニュースを聞いて不安になった。それは無理からぬことである。  
 (12) a. J'ai refusé, et (c'est) avec raison.  
 b. 私は断った。当然のことだ。

(10a) では統語的に従である前置詞句 with reason は意味的には主である。(10a) と意味的にはほぼ同じ (10b) では with reason が意味的に主であることが「無理はない」によって明示されている。(11a) では and を用いることによって with reason が統語的に従から主に向かっていることが示されている。そのため with reason がより明らかに意味的に主であることが示される。(12) で見られるように, フランス語でも同様の現象が観察される。

- (13) a. She justifiably refused the offer.  
 b. 彼女がその提案を退けたのも無理がない。  
 (14) a. Hoggart felt, with some justification, that his colleagues had let him down.  
 (*Longman Dictionary of Contemporary English*, New Edition)  
 b. 同僚がホガートの期待を裏切ったが, それはある程度無理からぬことである。

(13a) では統語的に従である副詞 justifiably は意味的に主である。(13a) と意味的にはほぼ同じ (13b) では justifiably が意味的に主であることが「無理がない」のによって明示されている。

(14a) では統語的に従である前置詞句 with some justification が意味的に主であることが「ある程度無理からぬことである」によって明示されている。

- (15) a. He was properly angry at the insult.  
 b. 彼がその侮辱に腹を立てたのは当然である。  
 (16) a. Chikamatsu is appropriately called the Shakespeare of Japan.  
 b. 近松は日本のシェークスピアと呼ばれるのにふさわしい。  
 (17) a. It is best ignored. (『ランダムハウス英和大辞典』)  
 b. それは無視しておくのが一番よい。  
 (18) a. The play can be best described as “a serious comedy.”  
 (*MacMillan English Dictionary*)  
 b. その劇は「深刻な喜劇」と述べることができるが, そうするのが最もよい。  
 (19) a. He was rightly punished.  
 b. 彼は罰せられたのも当然だ。

(15a) では統語的に従である副詞 properly は意味的に主である。(15a) と意味的にはほぼ同じ (15b) では properly が意味的に主であることが「当然である」によって明示されている。(16a) でも統語的に従である副詞 appropriately は意味的に主である。(16a) と意味的にはほぼ同じ (16b) では appropriately が意味的に主であることが「ふさわしい」によって明示されている。(17a) でも統語的に従である副詞 best は意味的に主である。(17a) と意味的にはほぼ同じ (17b) では best が意味的に主であることが「一番よい」によって明示されている。(18) も (17) と同様に説明することができる。(18a) でも統語的に従である副詞 best は意味的に主である。(18a) と意味的にはほぼ同じ (18b) では best が意味的に主であることが「最もよい」によって明示されている。(19a) では統語的に従である副詞 rightly は意味的に主である。(19a) と意味的にはほぼ同じ (19b) では rightly が意味的に主であることが「当然だ」によって

明示されている。

(9a) の well, (13a) の justifiably, (15a) の properly, (16a) の appropriately, (17a), (18a) の best, (19a) の rightly は文副詞である。文副詞は命題を修飾する副詞であるが、意味的には主であると言える。(10a), (11a) の with reason, (14a) の with some justification のような前置詞句も文副詞と同様に意味的に主となるということは注目すべきことである。

- (20) a. Most minerals can be profitably mined only where they occur in large deposits.  
b. 大抵の鉱物は大量に埋蔵されているところでしか採掘することができないが、そうすると利益がでる。
- (21) a. It can be read with profit as well as with pleasure.  
(*The Kenkyusha Dictionary of English Collocations*)  
b. それは読んで楽しいだけでなくためになりうる。
- (22) a. I read the book to my great profit.  
b. その本を読んでたいへんためになった。
- (23) a. I learned, much to my advantage, how to speculate in futures.  
b. 先物売買で山のはり方を覚えて、大いにためになった。
- cf. (24) a. I learned, to my cost, that driving without chains was unsafe.  
(*The Kenkyusha Dictionary of English Collocations*)  
b. チェーンを着用しないで(車を)運転することは危険であると、苦い経験によって学んだ。
- (25) a. The cat was frozen to death.  
b. その猫は凍えて死んだ。
- cf. (26) a. I am tired to death.  
b. 死ぬほど疲れている。

(20a) で統語的に従な副詞 profitably は意味的には主である。(20a) と意味的にはほぼ同じ (20b) では profitably が意味的に主であることが「利益が出る」によって明示されている。(21a) で統語的に従な前置詞句 with profit と with pleasure は意味的には主である。(21a) と意味的にはほぼ同じ (21b) では with profit と with pleasure が意味的に主であることが「楽しいだけでなくためになりうる」によって明示されている。(22a) と (23a) についても同じことが言える。(22a) で統語的に従な前置詞句 to my great profit は意味的には主である。(22a) と意味的にはほぼ同じ (22b) では to my great profit が意味的に主であることが「たいへんためになった」によって明示されている。(23a) で統語的に従な前置詞句 to my advantage は意味的には主である。(23a) と意味的にはほぼ同じ (23b) では to my advantage が意味的に主であることが「ためになった」によって明示されている。一見すると (24a) の to my cost は (23a) の to my advantage に似ているので注意を要する。(24a) の to my cost は意味的には 'from my cost' と解釈され、意味的には従となっている。(25a) で統語的に従な前置詞句 to death は意味的に主である。(25a) と意味的にはほぼ同じ (25b) では to death が意味的に主であることが「死んだ」によって明示されている。(25a) では to death は「結果」を意味する。それに対して (26a) の to death は「程度」を意味し、統語的にも意味的にも従である。

### 2.2.2. 不定詞節・that節

ここでは、統語的に従である不定詞節と that 節が意味的に主となる例を見ていく。

まず、不定詞節の例を見てみよう。

- (27) a. The rocket went up into space, never to return.  
b. そのロケットは打ち上げられて、決して戻らなかった。
- (28) a. Sunderland played an energetic game, to win four-two.  
(*A Comprehensive Grammar of the English Language*, p.1476)  
b. サンダーランドは奮闘して、4対2で勝った。
- (29) a. A man travels the world over in search of what he desires and returns home to find it.

- b. 人間は望むものを求めて世界中を旅し、うちに戻って望むものを見つける。  
 (30) a. She lived to be eighty.  
 b. 彼女は生きて 80 才になった。

(31) I came here to see you.

(32) We eat to live, not live to eat.

(27a) では統語的に従な不定詞節 *never to return* は意味的には主である。(27a) と意味的にはほぼ同じ (27b) では *never to return* が意味的に主であることが「決して戻らなかった」によって明示されている。(28a) でも統語的に従な不定詞節 *to win four-two* は意味的には主である。(28a) と意味的にはほぼ同じ (28b) では *to win four-two* が意味的に主であることが「4 対 2 で勝った」によって明示されている。(27a) と (28a) では主節と不定詞節はコンマで区切られている。このことによって不定詞節の主節に対する従属性が弱められ、意味的に主となり易くなっている。(29a) では統語的に従な不定詞節 *to find it* は意味的には主である。(29a) と意味的にはほぼ同じ (29b) では *to find it* が意味的に主であることが「望むものを見つける」によって明示されている。(30a) では統語的に従な不定詞節 *to be eighty* は意味的には主である。(30a) と意味的にはほぼ同じ (30b) では *to be eighty* が意味的に主であることが「80 才になった」によって明示されている。(27a) と (28a), (29a), (30a) の不定詞節はすべて「結果」を意味する。これに対して (31) と (32) の不定詞節は「目的」を意味し、ともに統語的にも意味的にも従となっている。

次に *that* 節の例を挙げる。

- (33) a. The box was so heavy that I could not move it.  
 b. その箱は非常に重かったので動かすことができなかった。  
 (34) a. No one is so busy that he cannot read the newspaper for a whole week.  
 b. 誰も丸一週間新聞を読むことができない程忙しくない。  
 (35) a. The building is so constructed that it will withstand a major earthquake.  
 b. その建物は大地震に耐えるように建てられている。

(33a) では統語的に従な *that* 節 *that I could not move it* は意味的には主である。(33a) と意味的にはほぼ同じ (33b) では *that* 節が意味的に主であることが「動かすことができなかった」によって明示されている。(33a) では *that* 節は「結果」を意味する。それに対して (34a) の *that* 節は「程度」を、(35a) の *that* 節は「様態」を、意味し、ともに統語的にも意味的にも従となっている。

## 2.3. 等位接続と従属接続

### 2.3.1. 等位接続から従属接続への交替

一般的には、等位接続は A and B (A, B は任意の等位的被接続要素 (conjunct) を表す。) として表すことができる。ここでは統語的に等位接続されていたものが意味的に従となる例を挙げる。B が意味的に従となる場合と、A が意味的に従となる場合がある。

まず、B が意味的に従となる例を見る。

- (36) a. bread and butter  
 b. Come and see me.

(36a) では *bread* と *butter* は統語的に等位接続されているが、(36a) は 'bread with butter' を意味するので、意味的には *bread* が主で、*butter* が従となっている。(36a) と似た例として *bacon and eggs*, *bread and cheese*, *fruit and cream*, *ham and eggs*, *meat and potatoes*, などが挙げられる。(36b) では *come* と *see me* は統語的に等位接続されているが、*Come and see me.* は 'Come to see.' を意味するので、意味的には *Come* が主で、*see me* が従となっている。(36b) と似た例として、*Go and buy some bread.*, *Let's try and swim against the current.* などが挙げられる。

次に、A が意味的に従となる例を見る。

- (37) a. nice and warm  
 b. She fell downstairs and broke her leg.



c. Work hard and you will pass the exam.

(37a) では nice と warm は統語的に等位接続されているが, nice and warm は ‘nicely warm’ を意味するので, 意味的には warm が主で, nice は従となっていると言える。(37a) と似た例には good and hungry がある。(37b), (37c) も, 基本的には, (37a) と同様に考えることができる。(37b) でも fell downstairs と broke her leg は統語的に等位接続されているが, She fell downstairs and broke her leg. は ‘As she fell downstairs, she broke her leg.’ を意味するので, 意味的には broke her leg が主で, fell downstairs は従となっていると言える。(37c) でも work hard と you will pass the exam は統語的に等位接続されているが Work hard and you will pass the exam. は ‘If you work hard, you will pass the exam.’ を意味するので, 意味的には you will pass the exam が主で, work hard は従となっていると言える。一般的には, A and B において, B の前に置かれた A は B の背景となる情報を表す傾向があるようである。この点は今後の研究課題としたい。

### 2.3.2. 従属接続から等位接続への交替

ここでは, 統語的に従属的に接続された節が意味的には主, すなわち, 等位的に接続されていると見なされる例を, 分詞節と when 節, 非制限的關係節, if not 節, as well as 構文に焦点を当てながら, 見ていく。

#### 2.3.2.1. 分詞節

一般的には, 分詞節は統語的にも意味的にも従である。すなわち, 主節と従属的な関係にある。しかし, 統語的に主節と従属的な関係にあるが, 意味的には主節と等位の関係にあることがある。

(38) Walking along the street, I met an old friend of mine.

(39) a. Young men by the dozen came up, asking her to dance.

b. Young men by the dozen came up and asked her to dance.

(『新英語学辞典』, p.833)

(40) a. On the old man's death, the property was divided, the greater part going to the elder son, the remainder to the younger.

b. On the old man's death, the property was divided and the greater part went to the elder son and the remainder went to the younger.

(『新英語学辞典』, p.833)

(41) a. Taking out a pipe, he stuffed the bowl with tobacco.

b. He took out a pipe, and he stuffed the bowl with tobacco.

(『カレッジライトハウス英和辞典』, p.2132)

(42) a. In another town, six miles away, four landslides occurred, destroying three houses, one main road and two electric poles.

b. In another town, six miles away, four landslides occurred, and destroyed three houses, one main road and two electric poles.

(38) では統語的にも意味的にも分詞節は主節と従属的な関係にある。それに対して(39a), (40a), (41a), (42a) では統語的には分詞節は主節と従属的な関係にあるが, 意味的には主節と従属的ではなく等位的な関係にある。例えば, (39a) は (39b) のように言い換えられるので, 意味的には分詞節 asking her to dance は主節と等位的に関係にある。(40a) は (40b) のように言い換えられるので, 意味的には分詞節 the greater part going to the elder son, the remainder to the younger は主節と等位的な関係にある。また, 分詞節が前置されている (41a) も (41b) のように言い換えられるので, 意味的には分詞節 taking out a pipe は主節と等位的な関係にある。(42a) は (42b) のように言い換えられるので, 意味的には分詞節 destroying three houses, one main road and two electric poles は主節と等位的な関係にある。

(43) a. He sat reading, with his wife sewing beside him.

- b. He sat reading and his wife sewed beside him.

(43a) では, with 節すなわち, with his wife sewing beside him は統語的には前置詞句であるので, 明確に主節と従属的な関係にある。しかし, (43a) は (43b) のように言い換えられるので, 意味的には with 節, すなわち, with his wife sewing beside him は主節と等位的な関係にある。

### 2.3.2.2. when 節

一般的には, when 節は統語的にも意味的にも従である。すなわち, 主節と従属的な関係にある。しかし, 統語的に主節と従属的な関係にあるが, 意味的には主節と等位な関係にあることがある。

- (44) It was past nine o'clock when we arrived in New York.

- (45) a. I was about to go to bed when the telephone rang.

- b. I was about to go to bed and then the telephone rang.

- (46) a. I had not been sleeping, when a strange noise woke me up.

- b. I had not been sleeping, and then a strange noise woke me up.

(44) の when 節は統語的にも意味的にも主節と従属的な関係にある。それに対して (45a), (46a) の when 節は統語的に主節と従属的な関係にあるが, それぞれ (45b), (46b) のように言い換えられるので, 意味的には主節と等位的な関係にある。(46a) のように when 節の前にカンマをつけることによって when 節が主節と従属的な関係ではなく等位的な関係にあることがより明確に示される。

### 2.3.2.3. 非制限の関係節

一般的には, 関係節は統語的にも意味的にも従である。すなわち, 主節と従属的な関係にある。しかし, 非制限の関係節は統語的には主節と従属的な関係にあるが, 意味的には等位的な関係にある。

- (47) This is the cat which she gave me.

- (48) a. This novel, which was written about a century ago, is still widely read.

- b. This novel, and it was written about a century ago, is still widely read.

(47) の関係節 which she gave me は統語的にも意味的にも主節と従属的な関係にある。それに対して, (48a) の非制限の関係節 which was written about a century ago は統語的には主節と従属的な関係にあるが, (48a) は (48b) のように言い換えられるので, 意味的には主節と等位的な関係にある。which で始まる関係節の前にカンマをつけることによってその関係節が主節と等位的な関係にあることがより明確に示される。

### 2.3.2.4. if not 節

一般的には, if 節は統語的にも意味的にも従である。すなわち, 主節と従属的な関係にある。しかし, if 節が統語的には主節と従属的な関係にあるが, 意味的には等位的な関係にあることがある。

- (49) The cat will come if you call her.

- (50) a. He is pleasant, if not charming.

- b. He is certainly pleasant, and probably/possibly/maybe charming.

(Okada (2001 : 126))

(49) では if 節は統語的にも意味的にも主節と従属的な関係にある。それに対して (50a) では if not 節は統語的には主節と従属的な関係にあるが, (50a) が (50b) のように言い換えられるので, 意味的には if not 節は統語的には主節と等位的な関係にある。

### 2.3.2.5. as well as 構文

一般的には, A as well as B (A, Bは任意の要素を表す。)において, BはAに対して統語的にも意味的にも従である。しかしBはAに対して統語的には従であるが意味的にはAと等位的な関係にあることが

ある。

- (51) He gave us clothes as well as food.  
 (52) a. He gave us food and clothes as well (as food).  
       b. He gave us clothes and food as well (as clothes).  
 (53) As well as food, he gave us clothes.

(51) は曖昧で、(52a) と (52b) の二つの読みを持つ。(51) が (52a) の読みを持つ場合、(51) の food は clothes に対して統語的にも意味的にも従属的な関係にある。情報構造的に言うとも food は既知情報 (given information) を、clothes は新情報 (new information) を表す。換言すれば food よりも clothes に意味的な重点が置かれる。それに対して、(51) が (52b) の読みを持つ場合、(51) の food は clothes と統語的には従属的な関係にあるが、意味的には clothes と等位的な関係にある。情報構造的に言うとも food は新情報 (new information) を、clothes は既知情報 (given information) を表す。換言すれば clothes よりも food に意味的な重点が置かれる。(53) のように as well as food を前置すると曖昧性はなくなり、(52a) の読みだけが可能となる。

ここで as well as 構文の成り立ちについて考える。

- (54) She can speak English as well as French.  
 (55) a. 彼女は英語をフランス語と同じくらい上手に話することができる。  
       b. 彼女はフランス語だけでなく英語も話することができる。  
       c. 彼女は英語もフランス語も話することができる。

(54) は本来 (55a) を意味する。それから (55b) を意味するようになる。さらに (55c) を意味するようになる。*Shorter Oxford English Dictionary* (p.2406) では as well as について「(wellの) 意味が弱くなり、‘both…and’, ‘not only…but also’ を意味するようになった。」(With weakened force, passing into the sense of ‘both…and,’ ‘not only…but also’) と説明している。さらに Quirk et al. (1985: 982) では as well as を準等位接続詞 (quasi-coordinators) と見なしている。すなわち、ある時は等位接続詞のように、またある時は従属接続詞または前置詞のように (sometimes like coordinators, and at other times like subordinators or prepositions) 機能すると述べている。

最後に A as well as B において、B が A より長い場合は ‘A and B’ と解釈され易くなる例を見る。

- (56) Article 99 : The Emperor or the Regent as well as Ministers of State, members of the Diet, judges and all other public officials have the obligation to respect and uphold this Constitution.  
 (下線部は筆者)  
 (57) 第九十九条 天皇又は摂政及び国務大臣、国会議員、裁判官その他の公務員は、この憲法を尊重し擁護する義務を負ふ。  
 (下線部は筆者)

(56) は日本国憲法の英文であり、(57) は日本国憲法第九十九条の条文である。興味深いことは (56) の as well as が (57) では「及び」になっていることである。A as well as B の B が A より長いと、B は新情報を表しやすくなり、B に焦点が当てられる。

### 2.3.3. 類像性

類像性 (iconicity) は記号がその対象と類似性を持つことを意味する。英語の文は出来事の時間的順序を反映していることあるが、それは類像性の一例と考えることができる。上で見てきた不定詞節、that 節、分詞節と when 節は、いずれも文末に置かれている。類像性の視点からは時間的に先行する出来事 (または原因) を表す節の後に時間的に後続する出来事 (または結果) を表す節を置くのが自然な節の配列である。その結果、文末に置かれた節は統語的に従な、すなわち、主節と従属的な関係にあっても、文末重点原則 (End-weight principle) に従って、意味的には際立ちを与えられ、主節と等位的な関係になる。福地 (2007: 8-9) に基づいて、不定詞節、that 節と分詞節について類像性の視点から考察する。

- (58) a. We should state our opinions as briefly as possible to give other people chances to speak.



- b. 自分の意見はなるべく手短にして、他の人に話す機会を譲るようにしなければならない。
- (59) a. The government built reception centers that took care of the refugees.  
 b. 政府は収容施設を作り、難民の世話をした。
- (60) a. A minority people strongly opposed the government, producing many confusions in policy making.  
 b. 少数の人々が政府に強く反対して、政策決定に多くの混乱が生じた。

(58a) では時間的に先行する ‘state our opinions as briefly as possible’ の後に、すなわち、文末に、時間的に後続する ‘to give other people chances to speak’ が置かれている。(58a) に対応する (58b) に見られるように、文末に置かれた不定詞節は、意味的には主節と等位的な関係にある。(59a) でも時間的に先行する出来事 ‘built reception centers’ の後に、すなわち、文末に、時間的に後続する ‘that took care of the refugees’ が置かれている。(59a) に対応する (59b) に見られるように、文末に置かれた that 節は、意味的には主節と等位的な関係にある。(60a) でも時間的に先行する出来事 ‘strongly opposed the government’ の後に、すなわち、文末に、時間的に後続する ‘producing many confusions in policy making’ が置かれている。(60a) に対応する (60b) に見られるように、文末に置かれた分詞節は、意味的には主節と等位的な関係にある。

### 3. おわりに

本稿では、英語における主客交替現象について考察した。§ 2.1.では統語的に主であるものが意味に従となる例について検討した。§ 2.2.では統語的に従であるものが意味的に主となる例について検討した。§ 2.3.では等位接続と従属接続の交替について検討し、類像性に基づいて説明をした。

### REFERENCES

- Fukuchi, Hajime (福地 肇) (1995), 『英語らしい表現と英文法－意味のゆがみをとまなう統語構造』 東京：研究社.
- (2007), 「英語学から見た英作文」『英語青年』153 巻 7 号, pp.8–10.
- Higashiizumi, Yuko (東泉 裕子) (2006), *From a Subordinate Clause to an Independent Clause: A History of English because-clause and Japanese kara-clause*. Tokyo: Hituzi Syobo Publishing.
- Okada, Nobuo (岡田 伸夫) (1994), “Coordination and Subordination,” in *Syntactic and Diachronic Approaches to Language: A Festschrift for Toshio Nakao on the Occasion of His Sixtieth Birthday*, pp.459-479, Liber Press, Tokyo.
- (2001), 『英語教育と英文法の接点』 京都：美誠社.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985), *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Uchida, Mitsumi (内田 充美) (2002), *Causal Relations and Clause Linkage: Consequential Participle Clauses and Their Use*. Osaka: Osaka University Press.

